



TITLE:

# ヘーゲル市民社會思想の基本的構造

AUTHOR(S):

平井, 俊彦

---

CITATION:

平井, 俊彦. ヘーゲル市民社會思想の基本的構造. 經濟論叢 1950, 66(4): 216-233

ISSUE DATE:

1950-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/132204>

RIGHT:

京都大學經濟學會

# 經濟論叢

第六十六卷 第四號

預金銀行における信用創造の意味……………中 谷 實

スガンチーの現實論的簿記理論……………岡 本 愛 次

ヘーゲル市民社會思想の基本的構造……………平 井 俊 彦

---

昭和二十五年十月

## ヘーゲル市民社會思想の基本的構造

平井俊彦

### 一 問題の所在

ヘーゲルの市民社會思想の意義は、「啓蒙期に於ける市民社會の自己主張とその抽象的否定に立つロマンティックの有機的國家の要求とを綜合する」<sup>1)</sup>とあり、従つてドイツに於ける近代市民社會の理念の體系化であると言われている。すなわちロマンティックが市民社會の實現をヨーロッパの墮落と考へ、これを抽象的に否定し去つたのとは反對に、それをば積極的に承認し自己の體系内部に取り入れる。だがそれを啓蒙期の社會觀に見られるように決して永久的な自然的秩序として承認するのではなく、それ自身の矛盾によつて不斷の運動或いは發展のうちにあるものとして證明する。従つて市民社會は辯證法的構造をなし、相對する二原理——自由意志の普遍性と特殊性——が矛盾相刻の過程を辿るものである。そしてこの内部の矛盾によつて崩壊する先きは、換言すれば相對立する二原理が統一され人倫態が具體的普遍性として顯現する場所是有機體的國家なのである。

もとよりこのように市民社會を把握したということは、ヘーゲルが斷えず鋭い現實感覺によつて西歐に於いて既に成熟しつつあつた市民社會の姿を觀察し、それ自らが生み出していた矛盾の克服の方法をドイツブルジョア

ジーとして官僚階級との妥協の立場から考えなければならなかつたという現實の要請に照して初めて理解される。だがこれと共に忘れてはならぬことは、青年時代既に社會的民族的基盤に即してキリスト教を捉えた態度等に見られるようなヘーゲルの對象的思維方法 *das gegenständliche Verfahren* である。この客體的且つ內在的把握こそ後の辯證法的思維の母胎であり、市民社會をその發展の相に於いて捉えしめた根幹である。しかもこの現實的な論理を支えているものは、徒らに現實を抽象的に否定し過去への回顧沈潜のみに終始せるドイツロマンティークとは異なり、未來への意欲の上に立つて現實を積極的に生きる啓蒙的情熱を漲らせていると共に、逆に歴史と事實のうちに深まり行くことこそ未來の理想を規定する唯一可能な道であると考える點で、單なるルソー的啓蒙思潮とはどこまでも峻別せられねばならない彼の歴史意識であろう。

このような視點からヘーゲルの市民社會思想の基本的な構造を眺めるならば、それは具體的にいかなる過程の展開を示すであらうか。私は本論に於いてヘーゲルの展開に即してその具體的構造を究明し、且つこのことによつてその思想の意味を吟味し併せてその限界を述べようと思う。

(1) 岩波倫理學講座第二冊、清水幾多郎著「市民社會」二三頁。

(2) Wilhelm Dilthey: *Gesammelte Schriften* Bd. IV *Die Jugendgeschichte Hegels* S. 6. 「對象的思維方法は始めから彼を支配してゐた。」尙ディルタイは本書においてヘーゲルの世界解の形成過程を *lebendig* に叙述してゐる。

(3) W. Dilthey: *ibid.* SS. 193—194. 初期の政治論文に於ける社會に對するヘーゲルの實踐的情熱と後期法哲學時代の現實妥協の態度との相異及び推移過程に關し詳論せずしてはヘーゲル市民社會思想を正しく捉え難いが、本論はその基本的構造を檢討する上から、これを暗示するに止め、より詳細な論述は後論に譲る。

## 二 市民社會の一般的構造

上に述べたようにロマンテークが市民社會の實現をヨーロッパの墮落と考へ、これを單に抽象的に否定し去つたのとは反對に、ヘーゲルはこれを積極的に承認し自己の體系の内部に攝取する。しかもこの態度の健全さは、「市民社會の創造」をば「理念の一切の規定に初めてその權利を支えた近代の世界」に屬せしめてゐる<sup>1)</sup>。併し同時に彼が近代的世界に存在するものとして市民社會を承認することは、スミスやカントのようにその實現に自然の意圖を見ることがなくてもなければ、或いはこれを以て人類に與えられた最高の課題として承認することでもない。ではいかなる態度を執るのであらうか。

擬てヘーゲルによれば人倫的精神の直接的な自然的形態である家族は子孫が兩親から獨立することによつて家族の多數性又は特殊性に分裂し、人倫態は市民社會へと推移する。このように身分的血縁的結合關係から全く解放せられた自由な且つ平等な個人に擔われた市民社會に於いては、市民各自は唯々自己の自然的欲望のみによつて動き自己の利益を追求する私人であつて「他のあらゆるものは彼にとつて無である」<sup>2)</sup>。すなわち市民社會を構成するものはアトムとしての個人であり、この個人のうちにヘーゲルは自己の自然的本能や感情に基づき私利私欲のみをこととする合理主義的な人間像を想ひ浮べていることは容易に推察せられるであらう。併しながら市民社會は先ずこの特殊性を第一の原理とすると言へ、同時にそれが一つの統一體である限り各個人の自然的恣意を貫ぬきこれらを統一せしめる秩序が存在するはずである。この統一の秩序をカントは次のように述べている。すなわち「個々の人々もまた諸々の民族の全體でさえもが、各々がその考へに従ひ一人が屢々他に逆らいつつ各自の意圖を追求しながら、彼らには目につかず一つ一つの導線として彼らには知られない自然の意圖によつて進んで行くのであり、そしてその促進に従事しているのであるが、彼らはこれを知らず知らずにやつてゐる」<sup>3)</sup>。と

ところでこの「自然の意圖」はヘーゲルに於いては普遍性の原理である。彼は言う。「市民社會にあつては各人は自ら目的である」と同時にまた「他者と關係することなしには各人はその目的の範圍を達成することは出來な<sup>4)</sup>。」とこに自ずと特殊の個人の生活は他者の生活との關連を持つに至り、それを通じて始めて自己の存在を可能ならしめうることとなる。換言するならば「他の人々は特殊者がその目的を果すための手段」であるとはいへ、「いずれの特殊の人々も他の人によつて、從つて同時に全く市民社會の他の原理たる普遍性の形式によつて媒介されたものとしてのみ、自己を主張し充足する。」<sup>5)</sup>しかも「特殊性と普遍性との兩者はひとえに兩者相互により、且つ相互のためにのみ存し、かくて「私は自己の目的を促進しつつ普遍的なるものを助成し、そしてこの普遍性は再び私の目的を促進する」という關係に立つ。從つて市民社會は「全面的依存の體系」Das System der allseitigen Abhängigkeit と言えよう。また他面この内部的秩序は、先にカントが「彼らはこれを知らず知らずに行つてゐる」と言つてゐることによつても明らかなように、各市民がその秩序の自覺の上でそれへの要求と努力とによつて作り出された人爲的なものではなく、「成員そのものの意識には含まれていない」という意味で、市民社會は無意識的必然性の貫ぬいてゐる國家である。

以上のように市民社會は自由意志の特殊性と普遍性との相互媒介によつて成立するのであるが、そこに於いて理念は完全には統一されておらず兩原理は相互に獨立し、寧ろ特殊性が前面に出ている。すなわち市民社會はどこまでも「彼自身の利益を目的とする私人」が活動する舞臺であつて、ここでは普遍性は個人には手段として現われるにすぎない。從つて市民社會は自由意志がその契機である特殊性と普遍性とに分裂し、特殊性が特殊性としての獨立的實在性を具備しているという意味で、「分裂の立場」Standpunkt der Entzweiung<sup>6)</sup>にあると言える。

ところで今まで述べてきたヘーゲルの考え方のなかに我々は彼をしてカントやスミスとは異なり、彼の市民社會思想をして獨目的なものたらしめた仕方に注目しなければならない。カントも既に指摘したように市民社會では「非社會的社交性」を本性とする人間が、その非社交性によつて自ずから調和的な世界を構成すると考える。これは社會的原子論から出發する當然の歸結であつて、ここにスミスの「見えざる手」或いはライプニッツの「豫定調和」と共通の地盤が見られよう。すなわち市民社會はカントに於いても同じく分裂の立場にあり、平等な獨立的存在としての個人から出發するのであるが、そこではどこまでも個人が自己の目的を追求するとき、その結果として各人の間に相互聯關が生じ普遍性が成立するという啓蒙主義の自然法思想が考えられているにすぎない。勿論ヘーゲルに於いても市民社會をアトムとしての個人から成る原子論の體系であるとは考えているのであり、その限りに於いてのみ近代市民社會を承認するのではあるけれども、ヘーゲルの普遍性は各個人の單なる機械的集合から構成されうるものではない。もしそうだとしたら市民社會は單に啓蒙主義的な社會像と何ら異ならなかつたはずである。しかしヘーゲルの市民社會はただそれ自體で存在を保つていくのではなくて、法哲學の世界にあるものであり、絶對的人倫態に關連せしめられて初めて存在することが出来るものである。カントのように兩原理が分別せられ悟性のカテゴリーとして捉えられる限り絶對的精神に到達することは出来ない。兩原理はあくまで人倫態の契機にすぎないのであり「全體がその媒介の地盤である」。否人倫態の本性は普遍性であり、これが自らの矛盾によつて自己の有限的契機として特殊性を生み出し、却つてそれが前面に出て獨立化し、逆に自己がそこから生み出された普遍性と對立する。かかる對立はやがて人倫態の自己分裂となり、「特殊性の原理が獨立的に自己を個體性に發展せしめる」段階が正に市民社會として位置付けられる。そして同時に特殊性が個體性に

まで獨立的に發展する「丁度そのことと共に普遍性に移行する。」<sup>70)</sup> 要するに特殊性が獨立的に支配する市民社會内部で特殊性の展開は自ずから特殊性の自己没落の過程であり、同時に自己の根底である普遍性開示の過程である。このような市民社會の捉え方こそ既に青年時代自己をカントなどの形式的自然法思想の考え方と對決せしめたヘーゲル獨自の考え方の發展であり、従つて彼の市民社會思想を最もよく特色付けるものである。ではこのように市民社會を見るならばそれはどのような過程を経て發展するのであろうか。この過程を次のような契機を通じて考察しよう。<sup>71)</sup>

- (1) Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts* S. 334.
- (2) Hegel, *ibid.* S. 334. 法哲學の世界に於いては人倫應 *Sittlichkeit* は自由意志發展の最後の段階に位し、その直接的自然的な契機が家族 *die Familie* 第二の契機が市民社會 *die bürgerliche Gesellschaft* であつて、何れも國家 *der Staat* への移行段階にある。

- (3) Karl, *Ideen zu einer allgemeinen Geschichte in der weltgeschichtlichen Absicht* S. 223. カント著作集第十三卷木村素衛譯四頁。

- (4) Hegel, *ibid.* S. 334.

- (5) Hegel, *ibid.* S. 154.

- (6) Hegel, *ibid.* S. 335.

- (7) Hegel, *ibid.* S. 157. 従つてヘーゲルは市民社會を *der notwendige Staat* と認めてゐる。

- (8) Hegel, *ibid.* S. 156.

- (9) Kant, *ibid.* S. 227. 邦譯「十頁。第四命題」自然がその總ての素質の發展を成就する爲に利用する手段は、社會に於けるこれらの素質の敵對關係 *Antagonismus* である。尤もこの敵對關係は結極は社會の合法的秩序の原因となるものである。私はこゝで敵對關係とは人間の非社交的社會性 *die ungesellige Geselligkeit der Menschen* であると理解する。即ちそれは社會へ



踏み込まんとする人間の社交である……。この點に關し武市教授「歴史存在論の研究」四四五頁—四四六頁、清水氏前掲書「三頁—二三頁參照。

- (10) Hegel, *Ibid.* S. 334. 「個別意志と普遍意志」更には「自由意志」の形成過程及び性格に關しては、金子武藏著「ヘーゲルの國家觀」二七四頁參照。

- (11) 市民社會に對するヘーゲルの固有の思想はすでに Ueber die wissenschaftlichen Behandlungsmethoden des Naturrechts, 1802 に見られる。すなわちそこで近代自然法思想をカント・ルソー等の形式的自然法と、ホッブス・グロチウス等の經驗的自然法との二つに分つて批判し、何れも自然法の學的取り扱い方が誤つていゝと考え、人倫觀から自然法の世界を見直そうとした。

Hegel, *Schriften zur Politik und Rechtsphilosophie* S. 329 ff.

### 三 市民社會の發展過程

#### 1 欲望の體系

普遍意志から生み出された特殊性の支配する段階が市民社會の體系であるとするならば、先ず自己の特殊的利益のみを追求する私人は主觀的欲望の主體として現われる。そしてこの欲望の満足は「この段階に於いては他人の所有並びに彼等の欲望や意志の產物であるところの外的事物」によつて先ず充足せられ、次に欲望と外的事物とを媒介する勞働によつて充足せられる。かくてこそ主觀的欲望も自己の定在を有することとなり、客觀性を有する。ところで人間は動物とは異なり悟性を所有しているが故に、外的事物をその自然的直接性に於いてではなく欲望を複雑化しそれに適合せしめようとする。従つてそれに應じて欲望充足の手段も特殊化し抽象化せられることとなる。ところでこの「特殊化された欲望に適合する同じく特殊化された手段を準備し獲得する媒介が勞働である。」<sup>2)</sup> しかも勞働による作成によつて充足手段に「價值と合目的性」が與えられ、従つて效用も増加する。

ここに我々はヘーゲルが先ず原子論の體系を抽象的個人の欲望一般から出發せしめ、物の使用價值面だけをそこから導出し交換價值は捨象せられているのに氣付くのであるが、注目すべきは更に次のような考えである。すなわち個々人の欲望は抽象化せられ、その充足手段も特殊化せられると他人のそれに依存し或いは制約せられて各個人は社會的關係に入り込む。そしてこのことは分業を通じて實現されるとし、ここに分業の意義を指摘していることである。ヘーゲルは言う。「個人の勞働は分業によつて一層單純となり且つこれによつて個人の抽象的勞働に於ける技能並びに生産量は増大する。」すなわちここにヘーゲルは分業の一般的性質を擧げ生産力の發達に言及しているが、これは勿論ヘーゲルが若い頃から斷えず西歐殊にイギリスの社會體制を觀察しミスやスチュアート<sup>3)</sup>の經濟學を研究していたことによつても首肯せられる。すなわち單に手工業的生產だけではなく産業革命を経て工場制機械工業が確立し生産力が著るしく増大しつゝあつた西歐の資本制經濟社會の活動を念頭に置いていたに違ひない。このことは次の言葉によつて一層明らかである。更に言う、「生産行爲の抽象は勞働を益々機械化し遂には人間を勞働から除外して、機械をして人間に代らしめることを可能にする。」しかもこの言葉は單に彼の分業が近代的な機械的なものであることを示すに止まらない。分業はただ生産力の發達の原動力であるというその積極面から更に一步前進して、勞働の機械化はやがて人間を勞働から排除してゆくという考えのうちに、機械制大工業の本質的矛盾を或る程度つきとめていたものと言えよう。だが要するにヘーゲルでは分業は依然として悟性的國家内部で「欲望充足のための人間相互の依存性及び交互關係を完成し必要缺くべからざるものとする」ところの普遍性の課題を果し、特殊性を媒介として「その對立を融和する役目を持つ」にすぎない。そして分業が必然的である悟性的な自然的秩序はやがて「主觀的目的と道德的意見とを具えた悟性が自己の不滿と

道德的不平とを洩らす場所」となり、理性によつて止揚さるべき「假象の段階」「人倫の喪失態」でしかない。

以上述べて來たように各人は分業を通じて自己の欲望を充足することが出来るのであるが、また一方古典經濟學に見られるように各個人の欲望の追求はその充足手段の生産を通じて社會全體の福祉を増進する。すなわち「各人は自己のために獲得し、生産し、また享樂しながら、しかも正にこれを以て他人の享樂のためにも生産し、獲得することとなる。」ここにスミスの「國民の富」National Wealth or Common Stock が生じ、これが市民社會の物的基盤となる。ヘーゲルの「普遍的持續的資力」das allgemeine, bleibende Vermögen がすなわちこれである。この資力は各人の分業による生産によつて構成された市民社會全體の經濟力であり、各個人は自己の教養と技能とに應じてこれから社會全體の生産物を分有することが出来る。このように普遍的資力から分配されたものがすなわち個人の特殊的資力 das besondere Vermögen である。だがこれは「一つは直接の個人的基礎によつて、一つはまた技倆によつて制約せられている。」しかも人間は生れながらにしてその自然的肉體的素質に於いて不平等であり、その上にその發展も種々の差別があるから、個人の技倆従つて資力も本來不平等である。

ところで社會の富の分配に關する様式或いは仕方は以上のように夫々各個人の特殊性に委ねられ多種多様であるけれども、「無限に多様な手段、並びに交互的な生産及び交易に於ける同じく無限に交錯した運動は、それらの内容に内住する普遍性によつて集合し、そして普遍的集團に區別される。」すなわち市民社會はその總體として見れば、その内部の分業や欲望充足の方法或いは教養の類似によつて「特殊の諸體系」から構成せられる。このように市民社會をその内的構成によつて分類するとき、それは次の三階級に分れる。先ず直接的な人倫態たる家族制度に照應する農民階級が土地の自然的生産物を財産として現われる。この封建的な家父長的階級に對して

次に「自然的生産物の加工作成をその職務とし、且つその生産手段を勞働反省及び悟性に、並びに本質的には他人の欲求や勞働による媒介に負うてゐる」實業階級が生ずる。ここでは前の階級とは異つて自然への依存及びこれに對する勤勞の從屬性はなく「彼自身の活動に自ら生産し享樂するものを負つてゐる」が故に獨立自由の精神が支配的である。ヘーゲルがこのように言うときこの反省的形式的階級こそ市民社會にとつて本質的なものであることが明らかであろう。ところが普遍性よりも特殊性がより特徴的である第二の階級に對し官僚階級を挙げ、これを普遍的利益を追求すること自體が自己の特殊的目的であるという言わば理念にとつて最もふさわしい階級とされている。政府が個人の自由に對する拘束であるべき市民社會に於いて官僚階級の存在を是認し、且つこれを重視していることは、當時のドイツ市民社會の姿を特色付けていると共に、ヘーゲルの官僚主義的意識を明白に物語つていよう。だがこのような考えをとるにせよこれらの諸階級のうち何れの階級に屬するかという職業選擇の根據を、究極に於いて「權利功績及び名譽を自らに與えるところの主觀的意見及び特殊的恣意のうちに横わつてゐる」とする點では、明らかに中世的な封建的身分的階級の意識とは異つて近代的人格を持つものとも言えよう<sup>9)</sup>。然しそれかと言つて各人の主觀的恣意によつて階級の何れにも屬さぬ抽象的な市民の存在をヘーゲルは斷乎として排斥する。「階級なき人間は單なる私人であつて現實性を缺く。」「一般に定在すなわち一定の特殊性に進み入るとき、從つて自己を全く特殊なる領域に限定するときのみ現實性を得る。」<sup>10)</sup>このようなことも現實に即して個人を具體的に捉えようとする態度はますますヘーゲルの思惟の健全さを示すものではあるが、階級構成は彼にとつてどこまでも理念によつて組織せられる「有機的全體」ではない。從つてここには依然としてロマンティックの有機體的社會觀の殘滓があり、古典學派にみられるような市民社會の生き生きとした具體的構造は見られ

ない。すなわち彼の近代市民社會の階級構成はブルジョアジーとプロレタリアートとの階級對立として見られず、つまるところ階級は身分 der Stand であつて資本主義經濟社會内部の階級でないと云われるのもここにあるのであろう。

- (1) Hegel, *ibid.* S. 159.
- (2) Hegel, *ibid.* S. 162.
- (3) Hegel, *ibid.* S. 163.

青年時代の政治社會經濟問題に關する情熱と關心に就いては W. Dittley の前掲書參照、Za Stewart's Volkswirtschaftslehre schreibt er einen ausführlichen Kommentar. S. 124.

- (4) Hegel, *ibid.* S. 198.
- (5) Hegel, *ibid.* S. 163.
- (6) Hegel, *ibid.* S. 164.
- (7) Hegel, *ibid.* S. 164.
- (7) Hegel, *ibid.* S. 164.
- (8) Hegel, *ibid.* S. 166.
- (9) Hegel, *ibid.* S. 167.
- (10) Hegel, *ibid.* S. 339.
- (11) 金子武藏著、前掲書參照、四二四頁、「經濟社會」

尙「ヘーゲル哲學と經濟科學」のなかで赤松教授は「ここに於けるヘーゲルの把握には手工業階級は存するが」未だ明白に勞働者階級がつかまれていない」と言われ、この原因を「その時代の反映」とされている。勿論このような時代的制約も考えられるが、更にヘーゲルが階級を社會内の對立として捉えず調和する役目を果すものとする有機體的な考え方を再考する必要がある。

## □ 經濟政策・社會政策

欲望の體系に於いては各人は社會的諸關係を通して自己の欲望を充足することが出来、逆に各人は自己の利益追求を通してのみ市民社會に寄與する關係が必然的であつた。併しながら市民各自が社會内部で安全に生活し得るためには、社會がその成員の生命及び財産を保護しなければならない。すなわち欲望の體系では各人の所有の權利は未だ抽象的なものとして客觀化せられていないが故に、これを法律として社會全體が承認し、それを現實化しなければならない。このような定在を與えられた普遍性が特殊性を規制するところに司法 *die Rechtsplege* の課題がある。だが司法に於ける普遍性による特殊性の規制は特殊性の支配する市民社會では不充分である。すなわち特殊性を生かしながら普遍性との統一がなされるのでなくてはならない。詳言するならば個人はすべて家族の結合から離れて獨立の人格となつてゐるから、これを市民社會が普遍的家族として保護し保證しなければならないのであるが、それは司法のように單に各人の生命とか財産の保護といつたような消極的な方策ではなく、更に進んで積極的に個々人の福祉を權利として實現し、それを増進させるように努めることが大切である。ここにヘーゲルは經濟政策或いは社會政策の問題を提起する。

然らばヘーゲルは市民社會の内部にその特殊性から生ずる矛盾或いは弊害を具體的にどのように考え、そしてその克服の方法をいかにして捉えているであらうか。別の言葉で言えば司法によつては除去しえない矛盾の領域がどこにあるというのだらうか。前に明らかにしたように市民社會の内部では各人の欲望充足は社會的分業を通じて行われ且つそれによつて社會全體の生産力は増大し従つて普遍的資力も人口も増大する。ヘーゲルは更めて言う。「市民社會が圓滑な活動を續けているならば、社會はその内部に於いて人口の増殖及び産業の發展過程に

ある」。この近代的産業の發展は既に指摘したように機械制工業による商品の大量生産を意味すると共に、欲望及びその充足手段の獲得が社會的聯關に入るということは、商品の販路の擴大を意味する<sup>2)</sup>。かくして社會の生産を擔當し資本及び能力に恵まれてゐるブルジョアジーには「財富の蓄積が増大する」と共に、他方生産手段を所有しない勞働者階級は機械制分業によつて益々勞働が細分化され單純化され、従つて同時に他の個別的な勞働に制約せられるから、勞賃は勞力が多大であるにも拘らず低廉であるという現象が生ずる。しかも彼等が生活するための資料は資本の生産する商品に依存するから、それへの屈従はいよいよ決定的となる。かくてヘーゲルは資本に隸屬し搾取せられるプロレタリアートの出現を指摘する。「大衆は社會の成員に必要なものとして自己を統御して行く一定の生存様式の規準以下に陥れば賤民 *Prolet* が發生する<sup>3)</sup>」。このように近代市民社會に於いて一方では資本の蓄積が行われ、他方ではプロレタリアートの發生とその貧困化を指摘し、しかもその階級を以前の有機體的階級構成での身分と峻別して近代的階級 *Klasse* としてゐることは、近代社會への鋭い洞察を示しているといえよう。更にヘーゲルは單なる貧民と賤民 *Armen* とを分け「貧困それ自體は何人をも賤民とはしない。賤民とは貧困に結合せる想念すなわち富者・社會・政府等に對する內的激昂によつて初めて規定される<sup>4)</sup>。と言ふ。かく支配階級に對する反抗心の有無によつて兩者を區別して規定するところから、或いは論者は「これはやがてマルクスの産業豫備軍と置き代えらるべきものである<sup>5)</sup>」としているが、ヘーゲルはこの規定のほかに更にナポリの乞食を例にとり輕浮怠惰な勞働意識のない賤民を想定している點で、彼の時代的環境的制約と思惟の不徹底さを思わせるものがある。

このプロレタリアートの貧困に對し當時英國の救貧法等の社會問題に斷えず關心を拂つていたヘーゲルは「貧

困がいかにして救済さるべきかという重要問題は特に現代社會を動かし惱ましつゝあるものの一つである」として自己の解決策を展開する。<sup>6)</sup> 彼は言う。「若し貧困に瀕する大衆を彼等の正常な生存様式の狀態に於いて保持すべき直接の負擔が富裕階級に課せられたり、若くはかかる直接手段が他の公共の財産——富裕な病院・慈善院・修道院——にあるならば困窮者の生存は勞働を媒介とせずに保證せられるであらう」。しかし徒らに自己の生活を他人に依存することは、個人の自由獨立と名譽とについての感情の原理に基く市民社會の人間として許さるべきではない。またそうであるからといつて彼等を自立させるために勞働の機會を與えて生産に参加せしめるならば、商品は益々大量に生産せられるが、他方ではその増加に比例して有效需要が伴わず「市民社會は財富の過剰を以てしても充分に富裕ではない」という弊害が生ずる。言わばヘーゲルは過剰生産過少消費説によつて生産と消費との不均衡を指摘し、市民社會の經濟的矛盾を解決することの困難さを告白するが、彼はマルクスのように實踐的にこの矛盾を止揚するのではなくして、ヨーロッパの社會を乗り越えて植民地進出と世界商業とに過剰生産の商品と過剰人口の捌け口を求めた。かかる樂觀的非現實的論述によつて鋭い洞察にも拘らず上に指摘したヘーゲルの持つ限界が一層明らかとなるであらう。

要するにこの社會政策もただ市民社會の持つ弊害を外部的秩序によつて除去しようとするにすぎない。つまりヘーゲルの言葉を用いれば「市民社會の特殊性のうちに含まれる普遍性を、この普遍者に於いて成立する特殊の目的及び利益を持つ群衆を保護し保證するための外的制度及び設備の一つとして實現する」にすぎない。<sup>7)</sup> 従つてこのように單に各人の福祉を外面的に實現するだけではなく、更に積極的方策を市民社會の内部で果すのが望ましい。すなわちこのことを市民社會の「理念に従つて特殊性そのものが自己の内在的利益に含まれるこの普遍者



を自己の意志や活動の目的及び對象とする」職業團體 *Korporation* に俟たなければならぬ。この職業團體では「市民社會の勞働組織がその特殊性の性質に應じて種々の部門に分れてゐる」が、それは同様な勞働組織に従うものが組合を結成して相互の利益を圖ろうとするものであることは言うまでもない。もつともこの職業團體は市民社會の原理に合致してゐる實業階級に最もよく見られるものであり、しかも職業團體に於いてこそ「特殊のものに向けられた利己的目的は同時に一般的目的と考えられ實證せられる」ものなのである。そして市民社會の成員は誰でも「その特殊的能力に従つて團體の成員となる」ことが出来、それに對して團體は「團體獨自の利益を管理し、成員をその技能及び誠實の客觀的性質に従つて一般的聯關の定める人數に定め、且つ特殊的偶然性に對して所屬員を監視すると共に、また彼等に宛てがわれるべき能力の訓練を引き受ける」等、要するに「彼等に對して第二の家族として現われる」<sup>8)</sup>。従つてここでは各成員は職業團體によつて自己の生計の保證を得ると共に、他方では市民社會の一體たる全體に屬し共同目的に向つて寄與するという名譽を持つ。かくして社會政策のように兩原理が外面的な仕方ではなしに內面的に結合してゐることがわかる。

ところでヘーゲルが近代市民社會に於ける矛盾を究極的に克服せしめようとした職業團體は、市民社會自らの必然的要請によつて生じた勞働組合とか企業會社ではなく中世のツンフトであることは明らかであろう。併しながら彼の考える市民社會はあくまでも中世的な封建的社會を超越しその否定に於いて生じた近代的な世界であり、ここにこそ單なるロマンテークの社會觀と峻別せしめる彼の歴史意識の意味もあつた。だが要するにその矛盾を克服せんとする方向をツンフトという中世的なものに求めざるをえなかつたところに、ヘーゲルの持つあらゆる限界をもつともよく捉へることが出来よう。<sup>10)</sup>ともあれ彼自身にとつては職業團體は各市民の福祉を社會政策のよ

うに外部的な制度によつてではなしに市民社會内部で積極的に保證し増進するものである。かくてこそ市民社會の最も特徴的な個人が自己のために配慮しながら、同時に他人のために行動することとなる。この無意識的必然性が「團體に於いて初めて意識せられ思惟せられた人倫體」<sup>11)</sup>となる。だが同時に職業團體はこうに市民社會内部で普遍性と特殊性が統一するものであるにせよ、矢張りそれは社會全體として見ると單にその内部の一つの團體という「制限せられ有限的なもの」<sup>12)</sup>であるにすぎない。従つて職業團體はその限りでのみ市民社會に属しているのであつて、社會全體の福祉は團體の範圍を擴大してこれを國家に求めなければならない。しかもこのことによつて團體は却つて自己の生命を見出すこととなる。ヘーゲルは言う。「國家の監視が團體の上に注がなければならない。さもなければ團體は化石し荒廢して貧弱な結社に沈み込んでしまふであらう」<sup>13)</sup>。かくて市民社會の矛盾の超克の方向をば民族共同體たる中世的な有機體的國家に求めたのである。

(1) 經濟政策或いは社會政策は Die Polizei の項で論じられてをり、司法によつて克服せられないところ社會的弊害を市民社會内部で特殊性の支配することから生ずる偶然性 Zufalligkeit として數多く列擧するが、本論ではその最も典型的なものを敘述するに止めた。

(2) Hegel, *ibid.* S. 188

(4) Hegel, *ibid.* S. 247

(5) 赤松教授前掲書、一七〇頁。

尙 Encyclopædie では先の Stand が考えられてゐるだけで Klasse という言葉は法哲學で用いられてゐるにすぎない。一旦市民社會を三身分によつて有機的構成を行つてをきながら、再びここで Klasse を持ち出しこれを Stand とは異つて調和的なものではなく敵對的なものと考へてゐる點は注意すべきである。

(6) Hegel, *ibid.* SS. 347—348

## ヘーゲル市民社會思想の基本的構造

- (7) Hegel, *ibid.* S. 189  
 (8) Hegel, *ibid.* S. 191  
 (9) Hegel, *ibid.* S. 192  
 (10) 武市教授はヘーゲルの職業團體に於ける中世への志向をゲーテのウィルヘルム・マスタールを引き合わせ、次のように言われる。「當時のロマン主義に於ける中世への回顧とともに、中世の習俗が諸方向に復活されているがこの職業團體もまたその一つである」と。前掲書、五二三頁。  
 (11) Hegel, *ibid.* S. 345  
 (12) Hegel, *ibid.* S. 194  
 (13) Hegel, *ibid.* S. 349

## 四 結 論

ロマンテークとの對決に於いて積極的にヘーゲル思想體系の内部に攝取せられた近代市民社會は、先ず獨立な人格として自己自身の利益を追求する個人に支えられた啓蒙主義的な社會像であつた。だが彼は啓蒙思想のように單に市民社會の實現に未來の理想を托しそこに自然の意圖を描くのではなく、どこまでも事實に即し歴史的發展の相に於いてそれを捉えようとした。従つて市民社會は相對立する二原理の相克の過程であり、その對立によつて發展しやがてその對立は止揚せらるべき運命を擔つていた。このような捉え方こそ近代市民社會を一つの自然的秩序としては認しその實現へと志向する啓蒙主義の歴史觀と袂別せしめるものである。しかもそれがなしえなかつた近代市民社會の矛盾を看取しその克服の方法を目指していることは、確かにその行きつく先きを見抜いていたと言えよう。更にこのことは一般に當時市民社會の發達が未だドイツに於いて現實化するに至らず、従つ

てその内部で市民社會の生活を體驗することが出来なかつたが故に、その外部に立つてこれを觀察するものにとつて近代市民社會は個々の特殊事情から離れてその純粹な姿で捉えることが出来たという現實を前提して初めて理解されよう。だが他方その内部に住む人のみが知る姿を正しくは捉えられない。ここにヘーゲルが市民社會の矛盾を或る程度洞察していたにも拘らず古典學派の持つ分析の正しさと生々しさを持たない所以が考えられる。しかもプロイセン官僚主義の立場に妥協したが故に市民社會の矛盾を止揚する方向をば逆に自己がそこからそれを打破して出て來た中世の政治型態に求め、プロイセンの絶對主義的國家にその課題を托したのである。このことによつて先に提起した啓蒙思潮とロマンテークとの綜合というヘーゲルの市民社會思想の意味が一層明らかになるとともに、その持つている限界も問題の展望も自ら示されるはずである。すなわち近代市民社會に內在する矛盾は決してヘーゲルの有機體的國家に於いて止揚せられるものではない。この課題はイデーの抽象的契機でしかないヘーゲルの市民社會思想を徹底的に批判し、よくそこから攝取せる現實的論理を以て近代市民社會を分析したマルクスに俟たねばならない。